

ベート(ב)の秘密

聖書原典の書き出しとしての「ベレーシート」

בְּרֵאשִׁית

●ヘブル語で「はじまり」を「レーシート」(רֵאשִׁית)と言います。副詞として使う場合には、前置詞の「ベ」(בְּ)を語頭に加えて、「ベレーシート」(בְּרֵאשִׁית)の形で使います。「レーシート」の語源は、「ローシュ」(רֹאשׁ)で、「頭、初め、指導者、先端」などの意味を表わします。例えば、元旦は「ローシュ・ハナシャ」、新月を「ローシュ・ホデシュ」と言います。聖書の最初の書き出しが「ベレーシート パーラー エローヒーム エット ハッシャマイム ヴェエット ハアーレツ」となっています。

●ところで、ベレーシートはヘブル語の第二番目の文字、名称は「ベート」。意味は「家」(「バイト」とも言います。聖書がなぜこの第二番目の文字で始まるのか。創世記という本の性質から考えるならば、第一番目の文字である「アーレフ」から始まるのが最もふさわしいはずです。なぜなら、詩篇の中には「アーレフ・ベート」詩篇というものがあり、一節ごとにそれぞれの頭文字に、22文字を「アーレフ」から順に並べて配置する叙述法があります。詩篇 119 篇はその良い例です。他にも、34 篇、37 篇、111 篇、112 篇、145 篇があります。

●そうした叙述法があるにもかかわらず、聖書が「ベレーシート」(בְּרֵאשִׁית)とあるのはなぜか。ラビたちの間に、さまざまな考え方(概念)があります。



●**第一の概念**は、「人は、未来に向かって開かれている」というものです。

ベートの書体は上下の右がふさがり、左側だけが開いています。ヘブル語は右から左に向けて書かれるため、左側が未来の方向ということになります。人は未来に向けて開かれている。また、自分より上を見ることなく、また自分より下も考えてはならない。そこからは何も生まれない。前に向かって歩くのみ。それが理解への第一歩とゆる、ベートの字形はそれを示しているという説。

●**第二の概念**は、「人は学び尽くすことがない」というものです。第二番目のベートから学び始めたということは、アーレフはまだ学んでいない。アーレフは常に隠されている。アーレフは原初における無限者の律動、それを理解することはゆるされていないのだという。だから、冒頭に「ベート」があるという。ちなみに、タルムード(ユダヤ教の經典の集大成)には、どの巻にも、第一頁がありません。すべて第二頁から始まります。たとえ全巻を暗誦するほどに修得しようとも、あなたにはまだアーレフが知らされていないということを肝に命じ、忘れてはならないというのがその心らしい。人はすべてを学びつくすことはできない。アーレフは常に隠されているからだ。この事実を心に刻み込んだ上で、前に向かって歩きはじめる。

●**第三の概念**は、「ベート」は「絶えず、展開していくもの、開かれていく」というものです。その場合は、アーレフはすべての根源そのものであり、見えないものです。いわば超越した神性を表わす概念であり、それが見える形にされると、「天と地」「光と闇」「善と悪」といったすべての領域を表わす概念として開かれてくる。

これがベートの概念である。中心にある本源としての目に見えない神性なる概念としてのアーレフが、目に見える世界に展開していく概念が「ベート」なのです。

- 第四の概念**は、「ベート」を構成する三つの文字が意味している概念だということです。つまり、「ベート」は、以下のヘブル文字が意味するように、「**神と人とが共に住む世界**」を表わすというものです。それは、神の御手によってのみ造られる家だということです。そこから、創世記が始まっているということです。つまり、なぜ、聖書が「ベート」で始まっているのか、その意味するところは、すべての本源である神とそのいのちが、目に見える形に現わされ、人と人との交わりの家の舞台の現われこそが「ベート」の文字の本質だということです。



- 有名な詩篇 23 篇を作ったダビデは、主のいつくしみと恵みに生かされてきたことを思いながら、「まことに、私のいのちの日の限り、いつくしみ(טוֹב)と恵み(חַסֵּד)とが、私を追って来るでしょう。私はいつまでも、主の家に住まいましょう。」と結論づけています。
- そしてまた、詩篇 27 篇にはこう記されています。「私は一つのことを主に願った。私はそれを求めている。私のいのちの日の限り、主の家に住むことを。」
主の家に住むとは、神と人とのかかわりの奥義です。
「主が家を建てる(בְּנֶה)のでなければ、建てる者の働きはむなし。」(詩篇 127:1)

●**第五の概念**は最も重要なことで、「ベーン」は「子」(「ベーン」 בֵּן)「息子」(「バル」 בַּר)を表わしているということです。ここでいう「子」と「息子」は、神の御子イエシュアのことです。ここに至っては、「子」と深いかかわりを持っている「父」(「アーヴ」 אָב)とのかかわりを知る必要があります。「子」の秘密は、「父」の秘密でもあるのです。これについては、拙者の「牧師の書斎」にある「主の祈り 2」の項目—「ヘブル語の「父」(アーヴ)の秘密」を参照のこと。